

聖書：マタイ 12：22～37

説教題：良い倉と悪い倉

日時：2019年6月16日（朝拝）

パリサイ人との論争が今日の箇所でも続きます。12章に入っただけで2つの記事が記されました。いずれも安息日を巡っての論争です。14節に「パリサイ人たちは出て行って、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。」と記されました。いよいよイエス様のいのちを取ろうと企む人たちの活動が始まります。今日の箇所でもパリサイ人たちはイエス様に非難の声を上げます。今日の問題は何でしょうか。そのきっかけはイエス様のいやしのわざに対する人々の反応でした。イエス様は悪霊につかれて目が見えず、口もきけない人を癒やされました。するとその人はものを言い、見えるようになりました。群衆はこれを見て驚いて言いました。「もしかすると、この人がダビデの子なのではないだろうか。」 「ダビデの子」とは約束のメシヤということです。この方こそ待ち望まれてきたメシヤなのではないか。そのように人々は驚嘆してイエス様に注目しました。この状況をパリサイ人たちとしては黙って見てはいられません。そこで彼らはすかさず、こう言って人々の評価を打ち消そうとしたわけです。「この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ」と。この彼らの発言、評価、言葉について、イエス様は語って行かれます。

まずイエス様は彼らの言っていることが矛盾していることを二つ述べます。一つは25～26節にあるように、もしわたしが悪霊のかしらによって悪霊を追い出しているのなら、悪霊の世界で分裂が起こっていることになり、その国は立ち行かない。いくらサタンでも、そんな愚かなことはしないということです。もう一つの矛盾は27節です。もしわたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているのなら、あなたがたの子らはどうなるのか。聖書の中にはユダヤ人の祈禱師も出て来ますし、イエス様以外の者がイエス様の名を使って悪霊追い出しをしていた事実も記されています。詳しい状況は分かりませんが、パリサイ人らの仲間にも、この種のわざに関わっていた人たちがいたのでしょうか。その仲間たちの悪霊追い出しは承認しながら、イエス様の場合は悪霊のかしらによると非難する。それは結局、自分たちをさばく言葉になるということです。このようにパリサイ人たちの言葉は良く考えられた上での言葉ではなかったわけです。それは矛盾だらけで、とにかく彼らはイエス様を否定したかった。その思いが先にあった上での言葉だったのです。

イエス様はこの出来事の正しい意味を 28～29 節で語ります。それは「わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」ということです。「神の国」とは神のご支配のことです。この世は人間が罪を犯して神から離れて以来、サタンの支配下にあるようになりました。そのサタンの下に悪霊どもの働きもあります。しかしイエス様はやがて十字架を通して、私たちの罪を解決する救い主として、神の恵みの支配をこの世にもたらし始めています。悪霊につかれて目が見えず、口もきけなかった人がいやされた出来事は、神の国がここに到来し始めているという目に見える印です。これは 29 節にある通り、強い人すなわちサタンに上回る力をイエス様が持っておられるからこそできることです。サタンに勝ち、サタンを縛り上げる力を持っている方だからこそ、そこに囚われていた人々を解放することができる。

このイエス様を前にして中立的立場はないというのが 30 節です。イエス様に味方しない者はイエス様に敵対している者であり、イエス様とともに集めない者は散らしているのであると。傍観しているだけという第 3 の立場はありません。味方か敵か、どちらかです。味方でなければ敵です。イエス様が神の国を広げる働きをしているのに、それを認めず、それに組しない者は、イエス様に逆らう者であり、散らす者と言われています。

さてこう述べた上でイエス様が今日の箇所ですべて取り上げているのは言葉の問題です。先のパリサイ人たちのイエス様に対する中傷あるいは非難の言葉との関連で、31 節では「御霊に対する冒瀆は赦されない」ということが述べられています。人の子イエス様に逆らう言葉を口にする者にはまだ赦される余地がありますが、聖霊に逆らうことを言う者は、この世でも次の世でも赦されない。ある人はこれを聞いて反対ではないかと思えます。イエス様こそ私たちにとって最も大事な方であって唯一の救い主なのだから、イエス様に対して逆らうことを言う者たちが赦されないのではないかと。しかしイエス様はここでご自分に対して逆らうことを言う者はまだ赦されると言います。たとえばペテロのことがあげられます。彼は後にイエス様を 3 回知らないと言います。イエス様を否定するのです。しかし悔い改めて赦されます。そういう意味で 31 節にある通り、どんな罪も冒瀆も真に悔い改めることを通して赦されます。では御霊に対する冒瀆とは何でしょうか。それは聖霊が示していることにあくまでも抵抗し、頑なな態度を取るこ

とです。28 節に「わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら」とありましたが、聖霊はそこでイエス様こそ救い主であることをはっきり示しています。そこで皆がそのことを認めざるを得なくなって、「この人こそダビデの子なのでは？」と声を上げています。そんな中、パリサイ人たちは故意に逆らっています。これが聖霊に逆らうことです。このように聖霊の働きに逆らい、意図的に反抗するなら、救いの可能性はなくなる。赦されなくなるということです。ヘブル人への手紙 6 章 4～6 節：「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となって、神のすばらしいみことばと、来たるべき世の力を味わったうえで、墮落してしまうなら、そういう人たちをもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。」 イエス・キリストこそ神が遣わしたメシヤであることを示す聖霊の働きかけを受け、そこに神の国の一端を垣間見、天からの光をある程度味わった上で、なおも心を頑なにしてこれを拒否し、神のわざをサタンのせいにする。このように故意に真理に逆らい続けるなら、どうして救いがその人に与えられるでしょうか。その人は自分で自分を赦されない者、赦しは不可能な者としてしまう。昔からある人はこの御言葉をもとに、自分は赦されない罪を犯してしまったのではないかと恐れしました。しかしそのように心から恐れているなら、その人はまだ赦されない罪に至っている人ではないと言えます。その人は悔い改めの道に進めば良いのです。その人は赦されます。しかし一向に悔い改めに向かわず、あくまで神からの働きかけを退け、逆らう道を行くなら、その人に赦しはない。それが聖霊に逆らうことを言う罪です。この恐ろしい状態に進まないようにとイエス様は警告しておられます。

さてこれを聞いてパリサイ人たちは、自分たちは御霊に対する冒瀆など言おうとしたつもりはない。そこまで大それたことは考えていないと弁解するかもしれません。つい口が滑り、不用意なことを言ってしまったまでだと。しかしイエス様は 33 節以降で、私たちの言葉が指し示す重大な事実について語られます。33 節に「木を良いとし、その実も良いとするか、木を悪いとし、その実も悪いとするか、どちらかです。木の良し悪しはその実によって分かります。」とあります。その木が良いか悪いかを知る良い方法は、その実を見ることです。私たちが話す言葉は外側に出て来る実に当たります。それは私たちの内側がどうなっているかを指し示しています。34 節：「心に満ちていることを口が話すのです。」 35 節：「良い人は良い倉から良い物を取り出し、悪い者は悪い倉から悪い物を取り出します。」 良い倉から悪いものは出て来ません。ですからもし私たちの口から悪い言葉が出て来るなら、それは私たちの心が、私たちの倉が、そういう状態であるからです。

イエス様は最後 36～37 節でこう言われました。「わたしはあなたがたに言います。人は、口にするあらゆる無益なことばについて、さばきの日に申し開きをしなければなりません。あなたは自分のことばによって義とされ、また、自分のことばによって不義に定められるのです。」ここに最後のさばきの日に私たちがさばかれるのは私たちの言葉によると言われています。私たちはしばしば言葉より行いが大切だなどと言います。行いが重要であって言葉などは大きな意味を持たないと。しかしこのイエス様のお言葉によれば、そうではありません。言葉はその人自身を現しています。その人の内側を如実に物語るものです。ですからその言葉によってさばかれると言われても何の不思議もないのです。しかもここに「口にするあらゆる無益なことば」とあります。第3版では「むだなことば」と訳されていました。これは何とはなしにしゃべったあまり意味がないような言葉のこと。うっかり口から漏らしたような言葉、不注意にしゃべってしまった軽率なことばのこと。しかしそういう無意識に口から出た言葉こそ、実はその人の心を正直に映している鏡のようなものなのです。ヒョイとしゃべった言葉、調子に乗ってつい漏らした言葉、何気なく話した言葉。そこに私たちがどんな人間であるか、その心に何があるのかが現れているのです。

私たちはこのイエス様の言葉を聞いてどうすれば良いのでしょうか。余計なことはもうしゃべらないように、そしてぼろを出さないように、黙っていれば良いのでしょうか。人前では口にテープを貼っておくようにすべきでしょうか。イエス様はそのように私たちに口をつぐませたいわけではありません。いや黙ろうとしても、それは無理でしょう。私たちの内側の性質は必ず口を突いて外に出て来ます。どうしたら良いのでしょうか。大切なことは表面を一生懸命に繕うことではなく、私たちの内側の変革を求めることです。私たちの心を変えられること、良い倉になることです。自分を振り返る時、自分の倉は良い倉だと言える人はどれだけいるのでしょうか。むしろそれは良い倉でないということを知り、誰かが思わざるを得ないのではないのでしょうか。むしろ悪いものが満ちている。一生懸命に抑えて、それが外に出ないようにしているが、本当は恐ろしいものが詰まっている。それが何かの時にひょいと外に出て来る。自分勝手な発言であったり、誰かを傷つける言葉であったり、暴力的なことばであったり、人を見下すことばであったり、・・・。

しかしそんな私たちに望みがあります。それはイエス様が神の国の祝福を持って来ておられることです。私たちの心を造り変え、人間本来の状態への回復を導いてくださる方が来ておられる。ですから私たちは貧しい自分、あわれな自分を認めて、イエス様が差

し出してくださっている神の国を素直に受け取れば良いのです。パリサイ人のように反抗して、聖霊に逆らう罪の道を行くのではなく、神がここにはっきり示しておられることを目を見開いて見つめ、良いものをそのまま良いと告白する世界に生きれば良い。今日の箇所全体の文脈を考慮するなら、ここでの良い言葉とは何よりもイエス様を神からの救い主として認め、告白することを指しています。これが私たちの心がどういう心かを端的に示す決定的なことばです。私たちが聖霊の働きかけを受けて、そのように告白するなら、私たちは神の恵みの支配に生かされる者となる。そして心が変わられるなら、そこからは良い実が出て来るようになります。I コリント 12 章 3 節：「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」 エペソ人への手紙 4 章 29 節：「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい。」 コロサイ人への手紙 4 章 6 節：「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい」

私たちの言葉はどうでしょうか。私たちが口から出す言葉は、私たちの心について何を示しているのでしょうか。神の前には誰一人、生まれながらの状態、自分の心は良い倉だと言える人はいないと思います。しかしそんなどうしようもない私たちの心の倉を良い倉に変えてくださるイエス様がおられます。目の前に差し出されている神の国を拒否し、否定するのではなく、良いものを良いと素直に認める心で、最も大事な良い言葉を口から出す者にされたいと思います。その良い言葉、主キリストへの信仰のことばを出す時、私たちの日常生活の普段の言葉も少しずつ変えられて行きます。人々の成長に役立つ、聞く人に恵みを与える言葉、親切で塩味のきいた優しい言葉を語る者とされる。そうしてやがてのさばきの日に、その言葉を調べられて良しとされ、神の恵みを受け取って歩んで来たと判断され、神に喜ばれて天の御国に入れられる。その幸いな道を歩ませていただきたいと思います。